

井伏鱒二の会話部方言表現技法

——「朽助のゐる谷間」の場合——

藤 本 千 鶴 子

井伏鱒二の文章はきわめて意識的なもので、その一端としての会話部の方言表現もまた、ナマの土地ことばではないと言われている。

それではいったい、それは土地ことばとどう違うのか、井伏はどんな技巧を用いて、どういう効果をあげているのか。これは、文学作品への方言のとり入れ方の問題としても、あるいは、庶民造形やユーモアの表わし方の問題としても、おもしろい課題だと思われる。この稿では、彼の初期農村物の代表的な方法として、「朽助のゐる谷間」(昭4・4)の場合を見る。

はじめに、彼の方言の扱い方の変遷を見ておく。初期(昭2-6)には、郷里方言を基盤に、古態の語・文法的破格を誇張的に逆用して、筋の展開・笑い・人物造形に作用させている。(「歪なる図案」「談判」「谷間」「朽助のゐる谷間」「シグレ島叙景」「丹下氏邸」「川」「朝ノ津所見」など。)中期(昭8-15)には、山陰・山陽・四国・北九州・東北のことばに取材範囲が広がり、方言への好奇心からスケッチ風に写している。筋や人物造形との関連は薄い、断面の切りとり方は意識的である。「言葉について」「集金旅行」「金山踊」「鶏肋集」「八東・斐川」「狐見物」「土佐の高知」「樋ツア」と『九郎治ツアン』は喧嘩して私は用語について煩悶すること(など。)後期(昭14-)には、方言スケッチを介して奇矯な表現をやめ、共通語をまぜた平易な表現を筋の展開に作用させている。(「多甚古村」「へんろう宿」「追剝の話」「当村大字體ケ森」「橋本屋」「選擇隊長」「丑寅爺さん」「黒い雨」など。)大まかではあるが、こういう変遷の中から、文学史上でも特異な初期の方法の代表例を見ようとしている。

「朽助のゐる谷間」のモデル地は、井伏の郷里、広島県深安郡現在の加茂町で

ある。土地ことばと比較するには、実地調査をすべきだったが、今回はできなかった。次記の資料に拠った。

ア 「備後地方の敬語法」岡田統夫

イ 「方言」(『備後加茂』町史とパンフレットの中間的性格のもの。)中国観

光地誌社

ウ 「備後地方の『モー』ことば」岡田統夫

エ 「広島県神石郡油木町福本部落の方言における条件表現法」花本初子

オ 「打消の過去『〜ダッタ』・『〜ナンダ』・『〜ンカッタ』について——広島

島県三原市深町下組における——」岡田統夫

カ 「中国地方五県言語地図」広戸惇

キ 「方言学」藤原与一

ク 『全国方言辞典』東条操

ケ 「井伏鱒二の作品の中国弁」野地潤家

コ 「広島県賀茂郡豊栄町方言の表現法——文末話部、述話部、修飾話部、間投

・感動・提示話部——」広大方言研究会(敬称略。以下符号で引用。)

アによれば、備後方言としてのまとまりの中で、東南部の旧福山藩(深安郡・福山市・沼隅郡・松永市・府中市・芦品郡)とその他の地域とでは、ものにより多少の違いがあるとのことなので、旧福山藩方言を第一資料とし、その他の備後方言を第二とし、安芸東部山地と備中西部の用例を補助資料とした。

「朽助のゐる谷間」のテキストは、筑摩書房版全集を用い、方言で書かれた朽助の会話文95文を対象とした。

二

備後方言資料に見える語を作品からとり出すと、「是ツ非」(ア・イ)「いつ

そ(ア・イ・カ)「夢にも」(カ)「毛頭」(カ)「もそつと」(イ)「そつと
 二少し」(イ)「買うて」(イ)、「なあ」(ア)、「つがもない」(イ)、「いな
 げな」(イ)、「ぢや」(ア)「でがす」(ア世羅郡)「だります」(ア備後西
 部)「なざる」(ア)「なんだ」(オ)「ん」(ア)がある。八この他私の出身
 地備後向島町で使う語としては、「目方」「水ぎし」「すべ」「冬分」「料簡」
 「まがひもの」「咎」「吾れ・吾が」(第二人称と再帰的用法)「ーら」「なん
 ぼ」「なんぼうに」「なんぼうにも」「たつた」「まだ」(もつと・むしろ)
 「いやはや」「戻る」「こく」「くつたくする」「つらい」「不憚な」「まい」
 「てから」「ーしーし」「たら」(と言えば・てば)「たら」(とやら)「か
 ら」(ほど)などがある。ただし、井伏は「いつそ」を、古語の実に・非常にの
 意味と備後方言のむしろ・かえつての意味とに使っているが、ア・イ・カには、
 古語の意味はなく、かわりに全然・少しもの意味がある。「くつたくする」も、
 井伏は共通語の心がうっ屈するの意味に使っているが、向島方言では休息するの
 意味である。語彙としては、郷里方言もかなり使っていると見える。

ところが、文単位で見ると、必ずしも備後ことばらしくない。それはまず、
 備後弁の発音上の特徴、拗音化・長音化を捨象しているからではないかと思われ
 る。音の訛りをどの程度写しているかという点から、この作品と山代巴の「荷車
 の歌」(モデル地は備後北部布野村)との場合をくらべてみよう。

○ いま帯をしめなほしてゐるんですがな。そんなに言ひなざるな。(杵助のゐ
 る谷間)

○ わしや三つの年から他人の飯う食うて十九の年う拾わせてもろうたんでがん
 すもの、置いてくれるところがありやあ、どがあな辛い辛抱もいとうまいと
 思うてのう。(荷車の歌)

井伏の「帯を」と山代巴の「わしや」「飯う」「年う」とを比較すると、井伏
 は語と語の熟合による音の訛りを写していない。備後方言資料の用例から帰納す
 ると、前の語の末尾母音と助詞「は・を・へ(に)」は、別表のように熟合同化
 して規則的に拗音または長音となる。

たとえば、「ひゅうつきょうおもうても、ひやあつきやあせん。」(火をつけ
 ようと思つても、火はつきはしない。イ)、「イキンハルカ。ヨコシミヤ。」
 (横島へ。ア)のごとくである。ところが、井伏は作品中一例もこの熟合形を写

していない。

e	i	u	o	a	
ja:	ja:	a:	a:	a:	は
jo:	ju:	u:	o:	a:	を
e:	i:	i:	e:	ja:	へ(に)

い物言いをねらっているようだ。

また、動作進行態を井伏は「てゐる」としているが、キによれば、「中国四國
 では、『降ってイル』、『降ってル』とは言わない、『降り』に『おる』をつけた言
 いかたをする。」とあり、加茂町はキ・カ分布図に「フリオール」「フリオール」
 と熟合した形がでてゐる。備後弁での一語中の連母音同化の現象の一例である。
 井伏が「そんなに」と共通語にし、山代巴が「どがあな」と写しているもの
 は、備後加茂町では「こんぎゃあな」「どぎゃあな」(イ)と拗音化し、備後北
 部では「ドガーナ」(ア)と長音化する。

その他の音変化については略すが、以上の例だけでも、井伏が備後弁の発音の
 実態を捨象して、共通語または古態の語に直していることは明らかであろう。

井伏はなぜ捨象したか。ケには「『ばかり』を『ばー』と忠実に採録することに
 によって、かえつて意味の通じなくなるのをおそれることかとみられる。」
 とある。文学作品は全国の読者にわかる表現でなくてはならないから、これももち
 ろんある。が、山代巴式に近い写し方も可能なのだから、これだけではあるまい。
 山代巴の方言は読んでおかしくないが、井伏のはおかしい。方言べつたりで写し
 ては、井伏文学の諧謔性は失なわれるのではあるまいか。たわむれに、先出の
 「荷車の歌」の方言を井伏式にすれば、「それと申すのが、私らは三つの年から

他人の飯を食べて十九の年を拾はせてもらつたのであつてみますれば、置いてくれるところがありますなれば、どんな辛い辛抱もいとつまいと思つたのですがな。所詮はさういふことになるでせうがな。」とでもなろう。おそらく井伏は、ある種の語、ある種の言い回しを際立たせるために、発音表記の面は抑えたのだらうと思われる。

三

そこで、また語彙に目を移すと、備後方言だけでなく、共通語・古態の語・英語を雑居させている。

共通語表記のものには、「また」とか「行く」とか、備後方言も共通語も同じ語のものも多いが、山代巴式なら方言で書くところを共通語にしているものがある。先出の音の訛つた語を共通語にしているものほかに、「けえさ」(イ)を「今夜」、「よっぴてー」(イ)を「一晚中」、「しんびょうに」(イ)を「丹念に」などとしている。

古態の語には、古語と造語とがある。古語としては、「したれども」「さぞや」「ましてや」「さては」「さやうな」「何たる」「ど」「ども」があり、古活用の「なり」「たり」「まする」の奇妙さも目だつ。たとえば、朽助の家がダムの底に沈む瞬間、朽助は、「これはしたり、津浪が来たぞ。ああはや駄目なやうです。」と叫ぶ。場面の悲劇性にもかかわらず、読者をふきださせるのは、場ちがいな悠長な語を並べているからである。

英語には「ツリー」「アイズル」「アグリー」があり、初歩的単語を日本化した発音にして泥くさくしている。鷗外が挿入するドイツ語・フランス語の術字性とは効果がちがう。

互に別位相の共通語・備後方言・古態の語・英語を連ねることによって、その落差の大きさが笑いを生んでいる。

しかも、備後方言・古態の語・英語は、限られた語を選んで、くり返し用いている。誇張したものと言えよう。たとえば、井伏が「でがす」「だります」としているものを、旧福山藩方言ではどういうか。アによれば「でゴザンス」「でゴワンス」「でゴザリヤンス」「でゴダリヤンス」「でアリヤンス」「チャリヤンス」「デヤンス」「ダリヤンス」「チャリマン」などがあり、その他の備後方言に

は、「でアリマス」「ダリマス」「でゴワス」「でガンス」「でギヤンス」「でガス」「でゴザン」「でゴワン」「でガン」など、ていねいさに差はあるが、実に多様な言い方がある。ところが井伏は、その中から「でがす」と「だります」を選んで、「でがす」の場合は18例、すべて終止形にそろえているのである。これと関連して、備後方言にないと思われる文末詞「がな」を29回使っている中で「ですがな」を12例使っているのは、「でがす」との字面の似寄りを意識してそろえたのではないかと想像される。

音韻面での抑制、語彙面での誇張が、作品にどういう効果をもたらしているかは、文表現としてみる時はつきりする。

四

文法上の誤用を逆に利用しているものが、まず目だつ。

「さぞや走り疲れて死んだのぢやろか。の副詞「さぞや」は、推量の言い方と呼応するのであって、「か」を添えると呼応の法則が破れる。「もしや」なら坐りがよい。これは古語の「もしや」と「さぞや」の使い方を混同するような、朽助の愚昧を表わしたものとと思われる。「さぞや……ぢやろか」を目だたせるには、「走り疲れて」を「カケリクタブレテ」と方言にしてはならず、共通語にするこゝとによって色を抑えているのである。「多分は雉子の親鳥が、あとをつけて来て噛み殺したのぢやろか。」も同様である。

「ああはや、立ち退かずばなるまいでせうがな！」は、「まい」と「う」と推量の意味の重複する語を異加させて、朽助の愚かさを表わしたものである。「カネガ ナケラニヤ」(金がなければ エ)など、方言に異加強調の言い方はかなりあるのだが、「まい」の場合は、備後弁では「マー」と訛つても打消推量の意味を保っているから、井伏の操作によるものとみてよい。この誤用は、大仰な感動詞「ああはや」と文語的な「ずば」の言い方とによって、さらにひきたてられている。困みに、「シグレ鳥叙景」では、「得心ゆくものではないか、まいでせうがな？」と、デフォルメが一層激しい。

「眼鏡を脱ぎなされる」は、修飾関係を崩したものである。「かける」「はずす」「とる」など定まった被修飾語をとるところを、「脱ぐ」にすりかえることによって、意表をついたおかしみを出している。「吾れの卵を獲とられたる」も

「褒」を二字挿入しただけで、奇態な修飾関係になっている。

これらは、「膝栗毛」のナンセンスからそう遠くないと見ることもできよう。

「いつそ山鳥を食つた時の方が、まだうまからう。それといふのが、山鳥の方が同じ一びきでも目方がありますがな。」では、「うまからう」という判断と「目方があ」るからという理由とは、関係ない。文頭に「それといふのが」といかに論理的なもの言いをしそうな接続詞をもつてきておいて、あとで腰折れにしている。朽助の不合理なものの考え方を、二連文の関係をずらすことによって、ユーモラスに表わしたものである。ただし、味よりも目方を問題にするのは、当時の農民の食生活のせちがらさに根ざしたもので、単なる駄洒落ではない。せちがらさを真正面から訴えずに、笑いにまぎらすのは、井伏の照れである。

「魔物は九尺からもある鯉に似てゐるかもしれませぬが、鯉に似たるならばとて所詮は魔物なれば、その鯉といふのは、いつそ五色の鯉ぢやろ。」この文は「が」「ば」として「ば」という接続助詞で三回屈折しているが、判断は不合理で、朽助の迷信深さが拡大されている。ここでは、「所詮は」「いつそ」という副詞の絶対語がクセ者である。これは思考放棄のことだからである。副詞の絶対語は、この他「なんば」「なんばうにも」「何うあつても」「総じて」などがくり返し使われていて、朽助の頑固さを出している。「ああはや、何たる事ぢやろ。」など、感嘆文の頻用も、ひとりよがりの頑固を表わしている。これらの副詞、連体詞を、方言・古態の語にして目立たせているのに注目したい。愚かである上に頑固で、一旦思ひ込んだら不合理でも迷信でも改めようとしないとなると、救いたい人間ということになるが、作者がは朽助を冷笑的に扱っているだろうか。

「私らも、あなたが流暢な演舌をこくところは、またと見られんぢやろと思ひますがな。」の「こく」は、「バカー」「コクナ。」などごとく使う卑罵語である。こくは、「演説をしなざる」と尊敬語がくるべきところを、敬語法を誤らせて、彼の愚昧を表わしたものである。が、それは片面である。「利権擁護たらの演説」「新しき闘争とかたら」が朽助の実情からいかに浮き上がった観念的なものであるかは、朽助がダム工事に反対する理由が、谷を潰されては山鳥が食えなくなるからだといういじましいものであることからわかる。「演説をこく」は、観念

性に対する朽助の無意識の批判を、笑いに転化して表わしたものである。田舎では、講釈をたれるなどと言って、観念的なものへの拒否反応は強いが、朽助の口を借りた井伏の発想の基盤にそれがないとは言えないだろう。また、「演説を聴く」でなく「見る」としているのにも、神経が行き届いていることがわかる。

「利権擁護」や「新しき闘争」の観念語が、朽助にとっては意味不明の呪文であることは、「たら」「とかたら」を添えることによって、てき面に表わされている。朽助が演説を見たいのは、自分が子守りをし、英語を教えた元の主人の立身の姿を、村人の嘆賞の中で確かめて、自分のことのように喜びたいためである。自分の生活権を守るために演説をしてくれるのだということのみこめないとこるに、朽助の面目は躍如としていて、左翼系知識人の欠落部に対する批判も徹底している。朽助の愚昧を笑っている読者を、実は井伏が逆に笑っていることを知るのである。これは、井伏の観念性嫌いが、庶民びいきに向いただけだろうか。そうではなくて、井伏は庶民の中に、意外に純朴な細やかな心の動きを見て、それをこそ大事なものとすいてつくしんでいるからだと思われる。

「眼鏡を脱ぎなさんと、あなたは尚さらにアグリーですがな。早う眼鏡をかけたりのさいといふたら、したれども、私はこれにかけてみたる。」面と向かって醜男だというのは、親しい仲でも失礼だろう。図に乗って言い過ぎたと気づいて、第二文でなだめている。それでも間の悪さがおさまらなくて、「したれども、私はこれにかけてみたる。」と、前文とトンチンカンな方向へ話をそらしている。「みたる」という舌たらずの物言いに彼の含羞が表われている。そもそも、第一文で「アグリー」だと言ったのは、主人への敬愛をモロにぶつけるのが恥かしくて、わざと無骨に言う、田舎人の屈折した愛情表現を表わしたものである。その無骨さの中にも気兼ねは表現している。「眼鏡を脱ぎなさん」が一つ。ナマの土地ことは「ブシャークナ」のどぎつさを捨てて、「アグリー」という片言英語によるあたりの柔かさを取ったのが二つ。これらの会話表現を通して、「私」に対する朽助の目つきは、恋する者のそれを想像させる。この作品には、みずみずしい抒情があるとあえて言いたい。滑稽本のナンセンスには遠いのである。

この例でもわかるように、井伏が朽助のこまかい心の動きを、しゃべる過程の中に定着させてみせていること、どぎつい色をばかすことがどんなに巧みであるか

ということが、明らかであろう。これらの複雑微妙な心の動きは、観念的説明はその粗い網の目をもれるであろう。心理描写では、この数倍の文言を要して、はたして捉えうるかどうか。ところが井伏は、一はけで、会話文の中に定着してみせたのである。

以上、「朽助のゐる谷間」において、方言で書かれた朽助の会話部の特徴的技法を見てきた。その方法は、土地ことばの発音通り写さず、共通語的にすることによって、かえって古めかしい間のびのした語をひきたて、さらに文法的破格を逆用することによって、愚かしくもいじらしい朽助像をイメージ化し、観念的説明や心理描写で捉え切れないかすかな心の動きを、一筆で描いてみせたものである。会話部方言表現の工夫として、成功したものと言える。また方言をとり入れた近代小説の流れの中で、本流はリアリズム方言だが、その対極に、デフォルメした方言の様式を開いたものとして意義がある。なお、木下順二、杉浦明平の方法との比較は、後にゆずる。